莊

此地、其用人力者、非物情之所欲、蓋避其地之低濕也、○略中　忠增公歸國之後、綿葛於野外、以分街巷、予觀夫新府勝狀、東西之衢其數九者、蓋象于陽數也、南北之陌其數五者、蓋象于五行也、士大夫之家于九衢者、三百、蓋取千禮義三百也、其營中之延袤方九十餘間、而不滿百者、虧盈而益謙也、○略中　是故、不日而華第創造之功成、士大夫迨庶人之新居、亦其功成矣。於是英雄霧列、俊傑星馳、尊君之願既滿、衆人之望亦足矣、不幾而新府爲一都會之地、不亦盛哉、

〔西遊雜記 三〕此日加治木の町に至りて止宿せり、此所は外城と稱して、士家凡三百家計船つきの町にて、商家も數多にて、大隅にては第一の市中と云所なり、是より肥後へ出る道有、薩州侯御一代に一度、此道筋を御通行有て、御參勤有と云、大口外城と云所には、士家五百軒餘も在當の武家ありと云、薩州界より、大隅をへて、再び薩摩の小河内と云所に番所あり出て、肥後の久木野村へ出る也、此道筋は近しといへども、難所の坂計にて通行なりがたき道といふ、

〔長門本平家物語 四〕丹波少將は、○略中　それ室野、船引、大山といひて、月影日かげもさゝぬ深山のがたるせきがんをしのぎこえて、日向のくに西方が島津の庄に著給ふ、かの庄内にあさくら野といふ所に、ひとつの峯たかくそびえて、けぶり絶せぬ所あり、日本さいしよの峯、霧島のだけと號す、金峯山、しやかのだけ、富士のたかねよりも、さいしよの峯なるがゆへに、名づけてさいしよの峯といふ、

〔薩藩舊記 前集十三〕新田右衞門佐義貞誅伐事、去年被下關東御敎書訖、而肝付八郎兼重以下輩、令同意義貞、於日向國所々擧旗、既及合戰之由、當國守護代、并島津莊總政所等、依馳申所差遣羽月四郎右衞門尉元眞也、早相催一族、馳向彼所、可被退治候、仍執達如件、

建武三年正月廿五日　　太宰小貳○高頼

廣武又次郎入道殿